

はじめに

白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター長 山路 憲夫

今、私たちはどんな時代に生きているのか。それを明らかにすることは教育・研究に関わる大学人にとって絶えざる課題ではあるが、今日、そのテーマはとりわけ重要な課題となってきたのではないか。

明治維新以降第二次大戦が終わるまでの日本は、外国との戦争の戦いの連続でもあったが、今、少子高齢化という内なる危機を迎えた。明治以降増え続けてきた人口はこれから100年の間に半減する。高齢化率は2050年から2060年にかけてのピーク時には40%を超えるという人類がかつて経験したことがない超高齢社会を迎える。

それを乗り切るための対応、対策が迫られているにもかかわらず、残念ながら昨今の政治はほとんど機能不全に陥り、行政も地域社会もなかなか有効な道筋を見いだせないままに、立ち往生しているかのようには見えぬ。

それだけに大学に、大学人に課せられる役割は重大である。

社会の要請に応える人材を養成するとともに、時代が突きつける課題、難問にも答えを見出さなければならない。

例えば、65～74歳の前期高齢者に比べ要介護度や医療的なケアの比重が大きくなる75歳以上の後期高齢者は今後20年間に現在の倍近くの1000万人増える。介護や医療だけでなくインフォーマルサポートも含めた福祉や住宅の確保も含めた地域包括ケア体制づくりが求められるが、その道筋は定かではない。それを支える財源、人材、地域のネットワークづくりをどう進めるのか。その中身作りには、これまでの学問の枠組みを取り払った学際的な研究の成果、力も求められている。

白梅学園は2005年に大学子ども学部を開設、以来、子ども学を教育、研究の柱に掲げてきた。子ども学は明確な定義や領域が確立されている訳ではなく、さまざまな専門領域からのアプローチによる学際的な研究が求められる分野である。少子化、子育て支援といった喫緊の課題にどう応えていくのか。

福沢諭吉は「文明論之概略」の緒言で、当時の学者たちに「あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」と語りかけた。長らく鎖国で西洋の文明を知ることが出来なかった学者にとって、明治維新の世となり、西洋の文明や学問を知ることができるようになった。二つの文明を比較できる時代にめぐり合わせたのは、学者にとってまたとない「僥倖^{きやうこう}」ではないかというのだ。

時代の変わり目に直面する大学人として、この言葉をかみしめたい。

本研究センターは、日頃の地道な研究・教育を支えるとともに、時代の課題に答えを出していく役割も担う。2011年度の研究と実践の成果を盛り込んだ「年報」No.17をようやく発刊することが出来た。今後とも、さらにその役割をかみしめ、内容を充実、強化していきたい。